

JASCT

ニューズレター

第13巻第3号

平成6年(1994年)9月

発行人: 松本清一 印刷所: 絢文社

第14回 日本性科学学会のご案内

第14回日本性科学学会を下記のとおり開催致しますので、奮ってご参加賜りますようご案内申し上げます。

メインテーマ: 「見直そう新しい時代のヒューマンセクシャリティ(人間の性)を」

期 日 平成6年10月23日(日) 9:25 ~ 18:00

場 所 山形市中央公民館 6 F 大ホール(山形市七日町1-2-39 TEL 0236-23-2150)

学 会 長 広 井 正 彦(山形大学産婦人科教授)

参 加 費 一般 3,000円 会員・教職員 2,000円 学生 1,000円

プ ロ グ ラ ム

9:25~ 9:30	開会の挨拶	第14回日本性科学学会長	広 井 正 彦
9:30~ 9:55	教育講演1 中高年婦人の性の現況とその対策-ホルモン補充療法の意義	山形大学産婦人科	小 宮 雄 一
9:55~10:10	学会長講演 生殖生理学よりみた婦人の性行動	山形大学産婦人科教授	広 井 正 彦
10:10~12:10	シンポジウム1 セックスストレスをめぐって		
13:20~14:20	一般演題		
14:20~14:50	教育講演2 セックス外来の経験から	千葉市立病院産婦人科副部長	大 川 玲 子
14:50~15:20	特別講演1 わが国の性科学の歩みと世界性科学学会の日本開催について	JASCT会長・日本家族計画協会理事長	松 本 清 一
15:20~16:00	特別講演2 日本人男女の性生活の実態について	札幌医科大学泌尿器科教授	熊 本 悦 明
16:00~16:30	教育講演3 新しいAIDS教育の進め方	千葉大学教育学部教授	武 田 敏
16:30~18:00	シンポジウム2 新しい時代の学校性教育のあり方		
18:00	閉会の挨拶	第15回日本性科学学会長	矢 追 良 正

注: 日本産婦人科学会、及び日本母性保護医協会会員で参加された方には認定医Aシールが配布されることになっています。

宿泊を希望される方は各自でご用意下さい。

学会連絡先: 〒990-23 山形市飯田西2-2-2 山形大学医学部産科婦人科学教室内 第14回日本性科学学会事務局
(小宮雄一、楊美貴、五十嵐久美子)(TEL 0236-33-1871)

Vol. 13

No.
3

JASCT 事務局

〒107 東京都港区南青山1-1-1 新青山ビル西館3F

長谷クリニック内

TEL 03(3475)1780 FAX 03(3475)1789

セックスができない

神尾記念病院 堀 一子
JASCTカウンセリング室

これまで既に9つの症例を紹介してきました。それらを見てみると症状名は様々でも、状態像にセックスレスが、あまりにも多いことに改めて驚きます。そして今回も、セックスレスです。

Jさん夫妻は、3年前に結婚しました。その前の、およそ2年間の恋愛期間中、彼らには性関係がありませんでした。Jさんは今まで付き合った男性達のように性行為を求めてこないJ氏を、むしろ好ましく思っていました。それを節度ある態度と想ったのです。その彼女の考えに、私は疑問を持ちます。節度があることと、愛し合っている男女が性交渉を持たないこととは、別問題ですから。

やはり問題は起きました。結婚式の夜、J氏がとったセクシャル行為は接吻だけだったのです。そればかりでなく、新婚旅行中の3週間、全く性行為を持とうともしないJ氏に、Jさんはただただあっけにとられるばかりでした。2人の間に初めて性行為が持たれたのは、結婚から2ヶ月目でした。その行為自体、勃起不全というような機能的な問題は全くなく、滞りなく行われたのですが、それはあまりにもあっけなく、ロマンティックなどというものとは程遠いものでした。その後二人の間に性行為は、2～3ヶ月に一度から4～5ヶ月に一度と、どんどん減っていき、治療に訪れる前の1年間には、一度もセックスはありませんでした。Jさんは満面に怒りを表し、時々長い間の怒りに疲れ果てた表情も見せ、かつ救いを求めて治療者に訴がる勢いでした。一方J氏のほうは、語気も弱くおどおどと、時々Jさんと治療者の顔色をうかがうように上目遣いをし、見るからに気の毒な様子でした。

J氏が1人で来た方が、話し易いとおっしゃるので、しばらくそうすることにしました。一人で治療に来るようになって、J氏は、ずっと勃起不全気味であったことを打ち明けました。J氏はそのことが男性として、とても不甲斐ないような気がしていました。J氏は、セックスをして妻に勃起不全気味のことを知られれば、自分の貧弱な男性性を妻に露呈してしまうことになる、思っていたのです。だからJ氏は、セックスをあっというまに終わらせてしまったり、めったにしなかったりしていたのです。

一方Jさんは不自然な夫婦関係のため、常に苛立っていました。ことあるごとに感情的に怒っていました。すると彼は、よけいおどおど妻の顔色をうかがうのでした。明らかに妻の男性性の方が勝り、J氏の男性性は弱体化していました。

そんな折り、J氏の実家で法事があることになりました。今までは、そういう席で親戚の人達に、「子どもはまだ？」と聞かれると、Jさんは適当に笑ってごまかしていました。しかしそれはとても不愉快なことでした。結婚して3年もたつのに子どもができないのは、Jさんに原因があると思われているに違いないと、彼女は思いました。事実、前回の集まりでは「どこか病院へいったら？」と親切にも忠告してくれる人までいました。Jさんはもうそんなことを言われるのは沢山だと思っています。

今度こそは親戚の人達の前で、本当のことを話してくれるようにJ氏に迫りました。そのころ治療の中で行われるべきことは、必要以上に大きくなってしまった妻の男性性を少し押さえてあげて、その間に劣弱化してしまったJ氏の男性性を回復させることでした。治療者は、妻には道理を話すのではなく、包み込むような女性性で対応していった時期でした。治療者は彼女の怒りや、悔しさを十分汲みあげたうえで、「でも、ちょっと彼がかわいそうな気もするね」と、ぼつりつぶやいたのです。後退していたJさんの女性性が、いきずいたのです。男性性、女性性は、男性の中にも女性の中にもあります。夫婦の間で、その男性性、女性性がバランスよく働いていることが大切なのです。J夫妻の男性性、女性性のバランスが少し回復して来ました。J氏は、親戚の人々の前で二人の状況を、プライバシーに差し障らない程度に話し、このことは、二人で解決するから心配には及ばない旨をはっきり伝えたのでした。いつも夫の実家からの新幹線では、いらいらして眠れなかったJさんが、この日の帰り初めて眠ることが出来ました。

2人の中の男性性、女性性が健康に機能し始めました。今までJさんが話さなければ会話が途絶えがちだった2人の中で、J氏が話すことが増えてきました。J氏にとって気が進まなかったセックスが、楽しくなってきた、回数も増えてきました。Jさんはもう怒らなくなっていました。

国際エイズ会議に参加して

千葉県立衛生短大講師
エイズ・カウンセラー 岡 本 京 子

今夏、8月7日～12日の6日間にわたり、アジアで初めての国際エイズ会議（今回で第10回目になる）が横浜市内で開催され、記録的な猛暑にもかかわらず、国内外から約14,000人もの多くの人々が参加した。筆者も会議事務局、国内リエゾン委員会のスタッフとして参加する機会を得た。その経験を通して得た会議の印象をここで報告したいと思う。

筆者のこの会議に対する強い印象はまず「多様性」ということである。まず第一に国際会議であるから参加者の民族・出身国が多様であるのは改めていうまでもない。そのため国によって社会状況が異なり、エイズをめぐる起こっている問題も様々である。女性の感染あるいは母子感染の増加が深刻なアフリカ諸国もあれば、薬物常用者の静脈注射回し打ちによる感染が重大な問題である国もある。売買春が法的に認められている国もある。また、一般的に医療施設の整備が充分でなく、抗HIV剤のAZTすら高価で入手困難な国もあれば、AZTをはじめとして、ddI、ddC、d4Tという4種類の抗HIV剤が使用可能な国もある。基礎研究の報告は別として、臨床、疫学、予防、教育、社会などのテーマにおける報告は、その国の社会状況に大きく影響を受けるため、その内容はきわめて多様である。

日本における自分の実践にすぐ明日からでも役立つ最新情報とを考えていくつかの分科会に参加した筆者にとって、のぞんだ情報は正直いってあまり得られなかった。このような感想は日本人の参加者の何人かから聞かれた声である。会議終了直後はそのことで残念な思いもしていた。しかし、今一カ月経てみると、その時の思いは少しずつ変化していることに気づく。うまくは言えないが、まず自分の実践を客観的に見られるようになったことだ。言い換えればもう少し幅広い観点から自分の実践を考え直せるようになってきた。さらに、現在の自分の活動場所は日本であるが、日本を越えエイズという地球規模の問題に今後自分がどう貢献できるのか考えざるをえなくなった。AIDSという問題は自国内の問題をうまく解決するだけでは、世界的な規模の解決にはならない。この点は以前より強調されていたことであるが、会議に参加したことで改めてこのことを実感させられた。

また、第二には、参加者の立場が実に多様である。一般に学会や国際会議といえば、参加者の大多数は研究者あるいは専門職などであることが多い。しかし、この会議の大きな特徴は、実際にこの病気と闘っている当事者、つまり、PWH/Aが積極的に参加していることである。PWH/Aとは people with HIV or AIDSの略語で、直訳すれば、HIVと共に生きる人々、エイズと共に生きる人々という意味で用いられている。（従来の感染者／患者という表現を用いないのは、当事者を医療や疫学などとの関係の中だけでとらえるのではなく、社会に生活している全人的存在として考えようという発想から生まれた表現である。）つまり、たとえばガンに関する学会にガン患者自身が積極的に参加しているようなものである。

彼らの参加によって、他の学会では珍らしいと思われる場面がいくつか見られた。抗HIV剤の最新治療に関するある分科会では、医師の発表に対してPWAの男性が自分の場合を例にあげ、その治療を自分に実施した際の効果について判断を求めたり、PWHの心理状態に関する看護職の発表に対し、1人のPWHが自分の心理状態をふりかえりながら、発表への批判を行う場面などもみられた。

PWH/Aの参加を促進しようとする考え方は会議事務局の方針で、それを実現するため、日本国外から参加を希望するPWH/Aには、旅費や会議参加費が提供され、また国内のPWH/Aに対しても、無料の登録パス（全日程・全プログラム参加可能の）が提供された。

また、多様な立場の人々といえばPWH/Aの他にも、AIDSに関連する援助団体／運動体や、この会議のために一般に募集されたボランティア（高校生、大学生、主婦、会社員など）の人々、そして、会議後半には一般市民の参加も可能となった。PWH/Aだけに開放され、準備されたPWH/Aラウンジ（休憩と相互交流を目的とする）では、70席あまりの会場の片づけに追われながら、PWH/Aの質問に慣れぬ英語で答えようとする高校生ボランティアの姿があった。また、援助団体の展示場では、赤ちゃんをだっこする若い母親や、中学生の娘に熱心に話しかける父親の姿もみられた。このような様々の人々の参加を得て、会議場は、熱気と活気と混沌とした雰囲気包まれていた。

考えてみれば、このような「多様性」こそAIDSという問題にとり組もうとする時、私たちがいつも念頭に置かねばならないことかもしれない。従来の医療と違い、エイズの医療では現在医師、看護職を越え、ソーシャル・ワーカー、カウンセ

セラー、臨床心理士、臨床検査技師などの専門職をはじめ、ボランティアそして、PWH/A自身も積極的に参加して、医療がすすめられつつある。このような多様な立場の人々が参加して医療をすすめることは、日本ではまだまだ新しい試みといわねばならないが、今後、さらにこのような傾向は強まるだろう。

そして、それらの人々をとり囲む一般の人々の支えである。これなしにけっして、エイズの問題は根本的に解決しない。

この2点は従来からAIDSの現状とその将来を語る際、何度となく指摘されてきたことである。しかし、会議はそのことを目の前でより鮮明にわたしたちに見せてくれた。この会議は、エイズの現場で働く者にとってこの点で大きな意義があったと確信する。

学 会 案 内

第12回世界性科学学会

日 時 : 平成7年8月12日(出)～16日(金)
場 所 : パシフィコ横浜 (横浜市西区みなとみらい1-1-1)
会 長 : 松 本 清 一 (JASCT会長)

第15回日本性科学学会プログラム

日 時 : 平成7年9月17日(日)
場 所 : 埼玉県県民健康センター大講堂 2F
(浦和・埼玉県庁前 Tel : 0488-24-2611)
学 会 会 長 : 矢 追 良 正 (独協医科大学越谷病院産婦人科教授)

プログラム

挨 拶 : J A S C T 会 長 松 本 清 一
埼玉県産婦人科医会会長 丸 山 正 義
特 別 講 演 : 「性科学と倫理」 中 谷 謹 子 (大東文化大学法学部教授)
教 育 講 演 : 「中高年婦人のQOL(性的側面)」 石 井 と く (広島大学保健学教授)
会 長 講 演 : 「女性の性意識と性機能の変化に就いて」 矢 追 良 正
シンポジウム : 「埼玉県における性教育」
モジュレーター 小 林 輝 夫 (埼玉産婦人科医会副会長)
他、教育講演、シンポジウム、一般講演

会費納入のお願い

10月より新しい年度(平成6年10月1日～平成7年9月30日)に入りますので、平成7年度会費15,000円の納入を、よろしくお願いいたします。手数料が無料となります。会の郵便振替用紙を同封しますのでご利用下さい。

銀行振込の場合 : 横浜銀行青山支店 普通預金918-042002 JASCT です。